

# 「網野銚子山古墳の世界」

2008年7月9日(水)～10月5日(日)

## はじめに

網野銚子山古墳は、古墳時代前期末～中期初頭に築造された前方後円墳です。銚子山古墳は、周辺の小銚子古墳・寛平法皇陵古墳とともに、大正11年3月8日に国史跡に指定されています。いずれの古墳もこれまで埋葬施設の発掘調査は行われていませんが、銚子山古墳・小銚子古墳は、昭和60・61年に墳丘の範囲を確認する調査が行われています。また平成19年より範囲確認調査を継続する予定となっています。あわせて銚子山古墳が古墳として認識されるまでの経過がわかる資料がいくつか発見されました。今回のコーナー展示では、研究史を振り返りながら、これらの一端を紹介します。

※文中人名の敬称は略させていただきます。

## 1. 亭子山(銚子山古墳)と法皇堂

宝暦13(1763)年の『丹後州宮津府志』では、寛平法皇陵古墳の記述があり、掘り出された石棺のスケッチが掲載されています。『丹後府志』には、石室があったことと「元より法皇の陵は亭子山にありと語り伝ふ」と記されています。明治6年には、地券交付事業に伴う絵図(地籍図)が各町村で作成されています。網野村のものは、製作年代が書かれていませんが、この時期のものと推定されます。この地籍図



【網野村地籍図】(明治6年カ) 部分

には、銚子山古墳の小字名が「亭子山」「古城主」と記載されます。そのため『丹後府志』の「亭子山」は、網野銚子山古墳であることがわかります。

明治28年12月の「古堂取調調書」(旧網野町役場文書001)に付随する絵図には、法皇堂の境内として「亭子山」が描かれ、出土した埴輪が壺のように描かれています。おそらく明治初期の段階には、網野銚子山古墳のテラス部分より丹後型円筒埴輪の上部が出土しており、その形から壺と誤認していたものと推定できます。

なおこれらの資料から、江戸時代後期から明治20年代までは、網野銚子山古墳が寛平法皇(宇多天皇)の陵墓と考えられていたこともわかります。



明治28年12月24日  
「古堂取調書」  
寛平法皇堂に付随する  
亭子山の図  
(旧網野町役場文書001)

## 2. 兎毛古墳の発見

竹野郡役所文書「遺跡遺物関係一件」(京都府庁文書)には、浅茂川村大字小浜(現在の網野町小浜)の薬師坊という共有山より発見された石窟(兎毛古墳)に関する文書が残されています。明治30年6月9日および9月17日付竹野郡長の上申書によると、石工が石碑に利用として石を掘ったところ窟穴(石室)が見つかり、中から地蔵石(石仏)2点、瓦器(須恵器等)2点、「法王」の二字を刻んだ石1点が見つかったことに始まります(石仏は村民が持ち込んだことが後に判明)。その後、地元で噂が広まり、村民が協力して試掘したところ大量の遺物が出土し、スケッチ風の図と実測図が作られています。須恵器類のほか耳環、鉄刀、馬具、玉類が出土しており、6世紀末～7世紀初頭の古墳であることがわかります。

なお郡長は、兎毛古墳発見資料の中に「法王」石があり、隣の網野村に寛平法皇堂や亭子山があることから、兎毛古墳が寛平法皇の御陵ではないかと考え、京都府へ吏員派遣を依頼しています。その後の経緯は不明ですが翌年4月には、佐藤伝蔵が亭子山(網野銚子山古墳)の調査に来丹します。

## 3. 佐藤伝蔵の調査

久美浜の稲葉市郎右衛門・宅蔵兄弟が佐藤の依頼によって銚子山古墳の写真撮影を行ったことは、『東京人類学会雑誌』の記事から明らかになりました。この佐藤来丹に関わる資料は、ほかに旧網

野町役場文書 001 に残されていることがわかりました。佐藤は、東京に戻った後、網野銚子山古墳に関する所見を、東京帝国大学理科大学人類学教室用紙5枚に記して網野村役場へ送付しています。

「丹後国竹野郡網野村銚子山ニ就テ  
京都府下丹後国竹野郡網野村ニ於テ銚子山ト称シ  
居ルモノハ自然ノ丘陵ニアラズ人類学者ノ所謂古墳  
ト称スル者ニシテ其年代ヲ云ヘハ今ヲ距ルコト大凡  
一千二百年乃至二千年来ノ者ナリ其如何ナル人ヲ  
葬レルヤハ単ニ之ヲ一見シタルノミニテハ固ヨリ容易  
ニ断定ヲ下ス能ハスト雖モ之ヲ外部ノ形式其他ノ模  
様ニ徴シ尚ホ之ヲ他ノ諸地方発見ノ古墳ト比較シ考  
フルニ単ニ可ナリニ高貴ナル人ヲ葬レル墳塚ナリト  
云フコトヲ断言シ得ヘキニ

山ノ外側ニ段階ヲ為シテ壺様ノ土器ヲ樹立セルハ即  
チ埴輪円筒ニシテ此類ノ古墳ニハ屢々之ヲ見ル所  
ナリ

凡テ埴輪ハ決シテ円筒ノミニ限ラズ其他人馬等ノ類  
ヲ模セル者ヲ樹立セルコト他所ニ多ク

之ヲ見ル所ナリサレハ銚子山ヨリモ亦必ス円筒以外  
ノ樹物ヲ発見スルヤ余ノ信シテ疑ハザ

ル所ナリ況ンヤ已ニ発見セル埴輪ノ破片中複雑ナル  
一種ノ沈紋ヲ有シ円筒ニアラサルモノアルニ於テ  
オヤ

凡テ人類学者ノ所謂古墳ト称スル者ノ外部ノ形状ニ  
ハ円形ヲ為スモノ瓢形ヲ為ス者ト二種アリ而シテ  
瓢形ヲ為ス者ノ中ニ前方後円ノ者前後共円形ノ者及  
ヒ前後共角度ヲ為ス者ト三種ノ別アルカ銚子山ハ  
即チ前方後円ノ瓢形ノ者ニ属スルナリ而シテ其長径



佐藤伝蔵書簡  
(旧網野町役場文書 001)



稲葉市郎右衛門が撮影した網野銚子山古墳（旧網野町役場文書001、明治31年5月22日）



網野銚子山古墳空中写真(現在)

凡ソ六十間後円ノ直径凡ソ三十間ニシテ其大サハ凡ソ古墳ト称スル者ノ中ニテ中等ニ位スル者ナレバ其身分ノ如キモ恐クハ可ナリニ高貴ノ人ナラント思考ス

銚子山ノ附近ニ小銚子山ト称スル瓢形ノ小丘及ヒ茶臼山ト称スル円形ノ小丘其他法王堂ト称スル円形ノ小丘ハ亦決シテ自然ノ丘陵ニアラズ所謂大古墳ノ陪塚ニシテ従者其他親密ノ関係アル者ヲ葬レルモノナリ此等陪塚ヲ有スルノ点其他外部ノ形状及大サ等ヨリシテ銚子山ハ決シテ平凡ノ人ノ墳墓ニアラサルコトハ余ノ信シテ疑ハサル所ナリ古墳ニハ石棺槨ノ存スルモノアリ又存セサルモノアリ其存スルモノハ内部ニ小石ヲ敷キ遺体ヲ其上ニ置キ副葬品(刀劍類玉類土器類等)ヲ其周囲ニ配列シ置クヲ常トス此石棺槨ノ有無ハ内部発掘調査ノ上ニアラサレバ容易ニ断言スルヲ得スト雖モ其陪塚タル法皇堂ニ石棺ヲ露出セリシ事実(明治三十一年四月二日稲葉宅蔵氏口話)ヨリシテ考レハ此銚子山ニモ亦同様ニ石棺槨ヲ存セルナラン乎

以上ハ単ニ其外部ヲ一見シタルノミニテ推測ヲ下セル者ナレバ甚タ粗雑ナルヲ免シサルモ其詳細ノ事実ハ更ニ精密ノ調査ヲ遂ケタル以上ニアラサレハ確言スル能ハサルナリ

東京帝国大学人類学教室ニテ

明治三十一年六月 理学士 佐藤伝蔵

佐藤が記した内容は、当時の考古学の知識としては最新の情報であり、現在の目で見ても納得できるものです。あわせてこの書簡には、銚子山古墳の研究史上、重要な情報が記されています。

①佐藤は、法皇堂(寛平法皇陵古墳)より石棺が出土したことを明治31年4月2日に稲葉宅蔵より聞いたと記しており、佐藤来丹の日時が確定しました。

②あわせて稲葉宅蔵は、寛平法皇陵古墳から石棺が出土したことを知っていたこと。

③佐藤の調査以前に「壺様ノ土器」が採集されていて、佐藤はこれを埴輪と認識していたこと。

④佐藤は、小銚子古墳と寛平法皇陵古墳を銚子山古墳の陪塚として認識していたこと。

そして何よりも佐藤伝蔵の現地調査によって銚子山は、古墳(前方後円墳)であることがはじめて認識されたことがわかります。

なお稲葉市郎右衛門英裕は、銚子山古墳の写真2葉を網野村役場へ送付しています。裏書には英裕が詠んだ漢詩・俳句が記され、また網野村役場において写っている人物名が追記されています。

#### 4. 帝国古蹟取調会の設立と網野銚子山古墳

帝国古蹟取調会は、明治35年に設立されました。あわせて京都府には、支部が設けられたようです。稲葉家文書には、「帝国古蹟取調会設立趣意書」が残されています(稲葉家文書A15・625)。

網野町では、佐藤の書簡内容をもとに、帝国古蹟取調会京都支部長へ亭子山の「古蹟調査願」が提出されています(旧網野町役場文書001)。その結果については不明ですが、古蹟取調会設立に伴って動きがあったことがわかる資料です。

#### 5. 増田千信の調査

明治43年7月1日には、宮内省御用掛の増田千信が丹後地域を訪れています。増田来丹の目的は、丹波道主命の墳墓が熊・竹野郡方面にあるように思われ、現地調査するためでした(稲葉家文書C50・136)。稲葉宅蔵の日記(稲葉家文書A28・007)によれば、増田は6月30日に久美浜から網野銚子山古墳・竹野郡役所へ至り、7月1日には稲葉宅蔵・坪倉重和(竹野郡教育会長)・柴田勝治(網野尋常高等小学校長)・小倉瀧蔵(竹野郡書記)の案内で網野銚子山古墳・兎毛古墳・離湖古墳・離山古墳をまわり、神明山古墳・竹野尋常小学校周辺の遺跡・小学校所蔵資料を見て峰山に向かっていることがわかります。なお7月1日に同行した小倉の復命書が竹野郡役所文書「明治四十三年古墳調査一件」(京都府庁文書)に残されています。同文書には、小倉が増田へ銚子山古墳と神明山古墳の資料(小字図・埴輪等)を送付した控えが残っています。小倉の復命書によれば増田は、「一小浜離湖上古跡(註:離湖・離山古墳)は別に由緒あるものにあらず、一小浜掛津界の石枕(註:兎毛古墳)も別に由緒あるものに思われず」とし、神明山古墳を「丹波道主命か彦坐王か竹野波津羅別王かの三方の一ならんと思われる」という見解を示したことがわかります。小倉の復命書からは、増田の遺跡に対する認識が垣間見えます。

なお同文書には、稲葉宅蔵が小倉・柴田に対して網野銚子山附近の字を「チヌシ」というのは、「道主」であり、マリコ親王は必ず彦坐王か道主命ノ旧跡であるだろうという見解を書簡に記しています。

このように増田来丹は、地元の歴史研究へ与えた影響が大きかったものと推定されます。

## 6. 『竹野郡誌』

『竹野郡誌』は、序文・緒言によれば、明治40年に京都府教育会竹野郡部会へ委嘱し、柴田勝治を中心に編纂され大正4年に刊行されたものです。

網野銚子山古墳に関する記述は、京都府立第四中学校の教諭であった加藤鉄三郎が執筆した「竹野郡歴史地理考」と町村誌の網野町の項にあります。前者は、網野神社との関係を考察し、彦坐王との関係を推定しています。また加藤は、寛平法皇陵古墳の石室が掘り出された際に現地を見ていて、凝灰岩を用いた縦坑（堅穴式石室）であった点と石枕の出土を報告しています。後者は、銚子山の陪塚として小銚子の存在と、丹波道主命または日子坐王の御陵であるとの伝説を記載しています。いずれの記載にも増田来丹の影響が伺えます。

## 7. 梅原末治の調査

大正6年に設立された京都府史蹟勝地調査会の委員であった京都帝国大学助手の梅原末治は、大正7年3月20日～29日に中・竹野郡と与謝郡の一部の調査を実施しています。

この時、梅原は網野銚子山古墳を訪れ測量図を作成し、「神明山古墳ト共ニ丹後ニ於ケル最大ナルモノタルト共ニ、亦広ク山陰道中ニ於イテ比類少キ古墳ナリ」と報告しています。あわせて銚子山古墳・小銚子古墳は埴輪・葺石の存在が、寛平法皇陵古墳は祠（法皇堂）の下に石室が露出していたと報告されています。また20余年前（明治30年代）に採集された石枕の写真が掲載されています。

## 8. 同志社大学考古学研究会による測量調査

戦後には、昭和40年7・11月および41年3月に同志社大学考古学研究会により測量調査が実施され、全長198m、後円部径116m・高16m、前方部幅75m・高10mを測ると報告されています。

## 9. ほ場整備に伴う周辺の発掘調査（図参照）

昭和50年代に入ると網野銚子山古墳の周辺は、ほ場整備が実施されることになり、遺跡の事前調査が行われました。

昭和51年に行われた林遺跡の調査では、弥生後

期～古墳前期および中世の遺構が見つかっていません。弥生時代後期～古墳時代前期には、堅穴式住居跡が5基確認されています。住居跡は、弥生時代後期の大型円形住居跡から、古墳時代前期の小型方形住居跡へと変化します。中世の遺構は、配石遺構7、井戸2、溝3、柱穴群などが見つかっています。また平安時代後期～鎌倉時代の黒色土器、土師器、白磁、緑釉陶器などが出土しています。



林遺跡の堅穴式住居跡（弥生時代後期）

その後、銚子山古墳の南側一帯についてもほ場整備を実施することが決定したため、昭和59～61年にかけて三宅遺跡の発掘調査および銚子山古墳・小銚子古墳の範囲確認調査が行われました。最初の予定では、銚子山古墳の墳丘裾までほ場整備の範囲に含められていましたが、範囲確認調査の結果、銚子山古墳前方部南東側の墳丘裾に周壕の跡が残ることが確認されました。そのため、ほ場整備の計画変更が行われ、墳丘南部の里道より墳丘側は造成工事の範囲からはずされ、保護されました。

昭和59年に行われた三宅遺跡の第1次発掘調査では、銚子山古墳から南西方向に舌状に伸びる台地とその下の平地部分をグリッド調査しています。遺物を含む包含層の分布は、銚子山古墳と小銚子古墳の間の平地につながる凹地部分を中心に、弥生時代後期の土器と平安時代後期～鎌倉時代の黒色土器、土師器、陶磁器などが出土しています。

## 10. 網野銚子山古墳の範囲確認調査

昭和60年には、銚子山古墳の前方部南西側から後円部の東にかけ墳丘裾部分が調査されました。

第3トレンチでは、1段目テラスに巡る埴輪列と墳



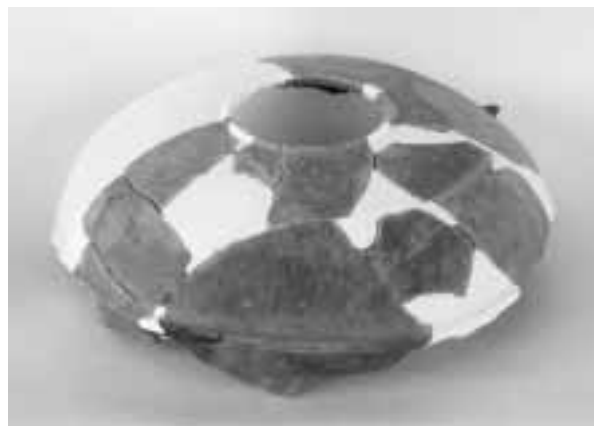
網野銚子山古墳と周辺における発掘調査地位置図

丘斜面に葺かれた葺石が見つかっており、墳丘が三段築成で葺石をもつことが改めて確認されました。墳丘裾は、後の削平を受けており、FW トレンチでは後世に改めて石が積みなおされている様子が確認されています。また銚子山古墳の墳丘にめぐらされた埴輪は、上部がすぼまる「丹後型円筒埴輪」が使われていることが改めて確認されました。

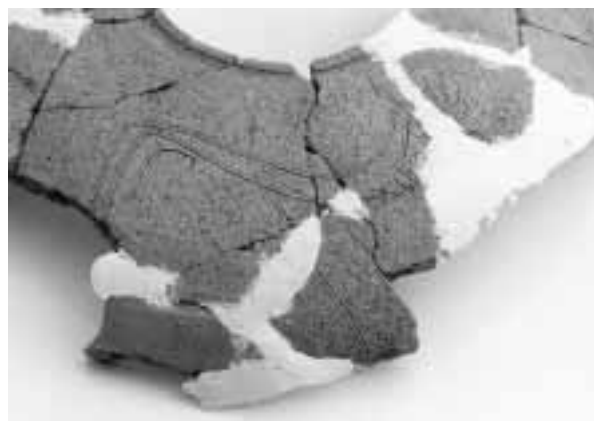
古墳が築造された地盤(地山)は、前方部では赤褐色粘質土層に対して、後円部では黄白色砂層となっており、両者で地山層が異なります。

また前方部では、周濠の痕跡が見つかり、墳丘の南東側半分は周濠が巡ることが確認されました。周濠内に堆積した土中には、周辺の三宅遺跡や林遺跡と同じように平安時代後期～鎌倉時代の土器等が含まれていることから、この時代には古墳と意識されことなく土地利用がされていたと推定されます。

なおこの調査時には、銚子山古墳の地形測量も行われました。岸本直文氏は、地形測量図をもとにして、網野銚子山古墳が五色塚古墳(神戸市)、佐紀陵山古墳(奈良市)と同一の企画と設計により施工築造されていることを指摘しています(岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第 39 巻第 2 号 1992 年)。



網野銚子山古墳出土丹後型円筒埴輪



網野銚子山古墳出土  
龍の線刻のある丹後型円筒埴輪



網野銚子山古墳第3トレンチ 葺石と円筒埴輪

### 11.小銚子古墳の範囲確認調査

昭和 61 年には、小銚子古墳周辺の範囲確認調査が行われました。調査前は、小銚子古墳の西側に平坦面が存在したため前方後円墳の可能性がありましたが、調査の結果、埴輪列と周溝が見つかりました。そのため古墳は、直径 36m の円墳で、西側を中心に後世の削平を大きく受けていたことがわかりました。また小銚子古墳の墳丘にめぐらされた埴輪は、「丹後型円筒埴輪」が使われていることがわかりました。



小銚子古墳出土丹後型円筒埴輪

← 小銚子古墳(K6トレンチ) 葺石・溝と円筒埴輪

### 12.大將軍遺跡の発掘調査

ほかに平成4～5年まで、林遺跡の北東に伸びる台地上に位置する大將軍遺跡の発掘調査が行われています。調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡2、中世の掘立柱建物跡・溝・ピット群・土壇が見つかっています。土壇 SX01 からは、土師器のほか、円筒埴輪、蓋(きぬがさ)型埴輪などが出土しています。また銚子山・小銚子古墳からは、丹後型円筒埴輪のみが出土していますが、大將軍遺跡からは少量の普通円筒埴輪が出土しています。しかし丹後型円筒埴輪は、両古墳出土のものと同じものであり、両古墳のいずれかに立てる予定で作られたものが何らかの理由で廃棄されたものと考えられています



大將軍遺跡土壇SX01 土器・埴輪出土状況

平成 20 年度丹後古代の里資料館コーナー展示 2

「網野銚子山古墳の世界」 展示解説シート

編集・発行 京丹後市立丹後古代の里資料館 2008 年 7 月発行

〒627-0228 京丹後市丹後町宮 108